アリストテレス存在論の基礎構造について（完）

岡野留次郎

一六

先づ質及び量の範疇について考察するならば、すべて個別的實有が世界環境内に於て實存する場合、それが單獨に存在するのではない。常に他の實有との聯關交渉に於て實存するのである。所で、かやうな實存する個物的存在は、現實的存在として、世界環境内に於て常に變化にさらされて居る。所で變化するのは現實的な個物をそうあらしめて居る本質的な質料及び形相ではない。ウシアの範疇は、個物の主體的現實性を確立するものとして、變化の中に在りながら、不變な個體の本質的形態を維持せしめる範疇である。所が個物が世界内に於て、他の實存的な個物との聯關に於て在る場合、自己を世界的に限定するのであるが、此際、自己を構成する質料及び形相の二つの原理の方向に限定を行ふ。質と量はそれぞれ形相と質料に根を持つもので、個物が他の個物と世界内に於て相會ふ場合、これとの聯關に於て自己を表現する二つの方向である。例へば、或人間が白さから黑さへ、黑さから白さへ移りゆくのは、その質料的基體が變化するのではない。寧ろその形相的な性格に基く或種の變化である。しかし、云ふ迄もなく此種の變化は、人間の本質的な形相そのものを變化せしめるものではない。云はゞ、人間存在が、世界環境内に於て、他の人間存在及び非人間的存在者と共に、相會ひ相働き合ふ場合に於て、他との聯關に於て自己を表現する形態間の推移であり變化であると云はねばならない。勿論このことの可能なるためには、個物の構成原理たる形相に、その變化の根據が存すると見たければならないが、單にそれのみで質的變化が可能となるのでなく、世界環境内に於ける他の存

在者との存在論的聯關と云ふことが、その現實的變化の限定基礎であらねばならぬ。

量的變化についても、同樣のことが云ひ得るであらう。或人間が子供から大人に成長し行くことは、人間の質料的な性格に基く變化ではあつても、直ちに人間存在を構成する質料そのものの變化ではない。それでは人間の本質を失ふであらう。況んや人間たる本質的形相そのものの變化でないことは勿論である。子供が大人になることによつて、質料的にも形相的にも、人間たる本質そのものが變化する譯ではない。變化するのはその量的性格であつて、これは世界環境内に於ける存在として現象する變化である。勿論かやうな變化をなすには、その基礎に質料的基體があり、そのものに變化の根據があること勿論である。が只それのみでなく、個體が世界内存在として、環境的世界との存在論的聯關に於て現象する變化であることは見逃せない。

量と質の範疇を右の如き意味のものと考へて來ると、第一義的には、個體の世界内に於ける自己限定の形式と考ふべきであつて、存在の最高類を示すと云ふことは、只導來的第二義的な意味に於てのみ云はるべきである。且又之等の範疇が、個體の主體的限定と表裏をなす意味に於て、個體の場所的・空間的限定の形式と見做し得る。何故なれば、個體はこれによつて自己と世界との存在論的聯關を明にするのであり、主體を主體として世界内に限定するものであるからである。

量と質の範疇は、個體を構成する二つの原理に基くと云ふ意味に於て、個體の質質的内容と最も深い關係を持ち、從つてこれと毫も關係を持たないと思はれる ἄποιος τι とは云はゞ兩極端をなすやうにも考へられる（ブレンタノ）。しかし、かやうな關係から範疇を演繹したものでないことは、ツェラーの說く範疇の順序を考へても明なことであらう。[1] アリストテレスのプロス・ティが、個體が世界内に於て相會ふ他の個體的存在との量及び質の上の關係を意味することを思へば、關係の範疇が、量及び質の範疇の次に考慮せられることは、蓋し當然であるであらう。そうして、プロス・ティは右のやうな意味に於て、特に個體の世界内に於ける存在論的聯關を限定する範疇であると云ふ意味に

於て、空間的・場所的限定の意味をこれに於て見出すことは、無謀とは云ひ得ない。

次にアリストテレスは、「何時」及び「何處」と云ふ二つの範疇を擧げてをるのであるが、彼が、時間や空間を範疇に數へないで「何時」や「何處」をそれに數へたと云ふことは、何を意味するのであらうか。時間や空間が、計量し得る限りに於ては、彼はこれを量の範疇に屬せしめてゐる。[2] 從つて、此兩範疇は、別個の意味を持たねばならぬ。これを單に存在の最高類を意味すると云ふのでは、了解し難いものがある。之に反し個體の世界に於ける限定の形式と考へることによつて最もよく理解し得るであらう。[3] 併しかく解すると同時に、この兩範疇の意義は非常に重大性を增すことを知らねばならぬ。若し此兩範疇が、個體を具體的に時處的限定をなす形式であるとすれば、我々が上來述べ來つた理由によつて、これこそ個體を個體として、世界に於て現實的に限定する根本形式に迄高められねばならぬからである。併しアリストテレス自ら「何時」及び「何處」の兩範疇をかやうな重大なものとして意識したとは考へられない。寧ろ彼はこの兩範疇を他のそれ等と共に、個體の世界內に於ける限定形式として取扱つたものと考へられる。卽ち或個體が世界內存在として在るには、一定の場所（例へば市場）に於て、或一定の時（例へば昨日）存在してをるのでなければならぬとの意味を述べたものと見られる。こう云ふ觀點から「外的な事情」äussere Umstände) と云ふ考も出てくる譯であらうが、單に「外的な事情」と云ふのでは、何故に特にこの範疇のみが選み出されねばならなかつたかの理由が理解され得ない。單なる「外的な事情」ではなくして、個體を個體として限定する存在論的形式として見れば、此兩範疇が、多くの外的な事情から特に選び出されねばならなかつた理由が明瞭になると思はれる。しかし、アリストテレスは此趣旨を自覺的に徹底して居るとは云ひ得ない。若し兩範疇に含まれてゐる存在論的意義を徹底せしめるならば、之等範疇の基礎に、更に高次の場所的限定と時間的限定を見出さねばならなかつたであらう。

更に ποσόν と πόσον の兩範疇に至つては、個體を世界內に於て運動し働くものとして理解する場合に最もよく

了解し得るものであつて、單に主辭と賓辭との論理的關係からその範疇的意味を理解しようとしても到底理解し得ない。賓辭によつて表現せられるものが、一部分主辭の內部から、一部分その外部から取り來られると云ふが如き關係から、此兩範疇の存在論的意義は理解せられぬ。只個體が他の個體と世界內に於て存在論的に相會ひ相働く場合の相互限定の形式として最も包括的な意義を有し來るのである。かく考へれば、κεῖσθαι や ἔχειν が、前者は ἀνάκειμαι や κάθηται により、後者は ὑποδέδεται や ὥπλισται などによつて說明せられるやうに、それ自體個體の世界內に於ける實存の仕方として理解し得られると同時に、屢〻廣義の ποιεῖν や πάσχειν の中に含ましめ得らるゝと云ふ考慮からして、恐らくは屢〻省略せられたと云ふ結果を見出し得るのではあるまいか。

若し以上の考察にして大過なしとすれば、ποιεῖν と πάσχειν は働く個體を最もよく示す範疇として、實存範疇の意義を明示するものと云へる。そうしてそれが個體をかく働く個體として世界內に限定する形式として、場所的限定の性格を帶びることも明である。

以上我々の論じ來つたところによつて、範疇の本質的意義、それが導來され來つた原理、主語的範疇と述語的範疇との關係、範疇相互の關係等が粗雜ながらほぼ明にせられた。處で之等の範疇が、個體を働く個體として世界內に於て場所的に限定する存在論的形式であるとすれば、之等は同時に時間的限定と何等かの聯關を持たなければならぬ。しかし、範疇の一つとして擧げられた ποτέ は、この任務を果すことは出來ない。それは更に複雜な內容を持つて來なければならぬ。我々は次にこの問題を論じよう。

註(1) Zeller, op. cit. S. 265 Anm.

(2) Cat. 6. 5n 6-7.

(3) 何故にアリストテレスは、時間・空間とは獨立に、「何時」と「何處」を範疇として立したのであらうか。トランデレンブルクは、空間・時間・場所は量の範疇に屬するに對し、「何處」及び「何時」は何故に獨立な範疇として確立され得るかの理由に關

し、自然學に於けるアリストテレスの說明(Phys. IV 13. 222 a 24)、卽ち νῦν は「今」に聯關して規定せられ說明せられて居る點を取上げ、νῦν はこゝでは現在に對立する時間點を意味するが、範疇としては、「今」及び過去、未來の一定の時間點を意味するものとして一層包括的なものである。併し、一應時間點を示すものとして、連續的量を示す時間と區別すべきであると說いてゐる(Trendelenburg, Geschichte der Kategorienlehre. S. 86 f.)。併し、單に連續量としての時間の一定の時間點を示すと云ふだけで νῦν が特に範疇として擧揚せられる理由は不充分である。問題は單に時間點を意味すると云ふ點にあるのではなく、或個體を世界內に於て、時間的に限定すると云ふ點にある。卽ち時間的に先立つもの、後れるものから區別して、或一定の現實的限定を與へることが、此範疇の任務である。τόδε についてもほぼ同樣なことがいはれ得るであらう。

一七

此問題を徹底的に論ずるためには、アリストテレス存在論に於ける他の重要な契機に觸れることが必要であらう。卽ち可能性と現實性の問題である。我々はアリストテレスが、可能性の種々の樣態を存在論的に辨別し詳論して居ることを知つて居る。可能的存在と現實的存在を區別し、各々その存在の形態について論究して居ることも周知の通りである。併し、我々は彼の存在論の基礎的な構造を問題にして居るのであるから、可能性と現實性が、彼の存在論の基礎的原理として妥當せしめる場合に、如何なる意義を持つべきであるかが、我々の問題なのである。そうして、この問題提出の下に於ては、之等の原理が、形相・質料の兩原理と密接な聯關を持つことは改めて說く迄もなく、更に運動變化と關聯して、時間と密接な聯關に持ちきたされなければならない。我々は次に此困難な問題に突き進もう。

我々は、アリストテレスの存在論を、個別的現實的實有を樞軸として、その基礎的構造を理解しようと努めて來た。所で個別的實有の世界內に於ける存在は、それが斷えざる變化にさらされて居ると云ふことを特質とする。個別的實有が、質料と形相とを構成的原理として持つと云ふことは、兩者がそれぞれ獨立な要素として、相結合して個體を構成すると云ふ意味ではない。[1] 個物が、現實的な個物として、常に生成變化にさらされて居り、それが常に、質料

的基體の形相的現實化として把握せられることを意味する。

元來アリストテレスの質料は、生成と密接な關聯に於て考察せられたければならぬ。否、生成の過程に横はるプポリアこそ、彼を導いて質料の概念に到達せしめたとも云ひ得よう。質料とは端的に存在でもなく、又端的に非存在でもない。凡そ生成が可能なためには、それは何ものかからの生成としてでなければならぬ。從つて何ものかゞ存在するとしなければならぬ。しかし、この何ものかは、生成しない限り、生成の後持ち來る形相的限定を缺き、その限り非存在とも考へられる。卽ち、生成に於ては、一の形相的限定から、他の形相的限定への轉移が問題となるのであるが、此一から他への轉移を可能にするものが、基體としての質料なのである。所で、かやうな基體は、それ自身無限定（ἀόριστον）であり、種々の形相的限定を取り得る限り、單なる可能性である。所で生成に於ては、質料は一般に既に或種の限定を受けて居る個物に於て、他の新しい形相的限定へ推移してゆかねばならないのであるが、質料がこの新らしい形相的限定を受け得るには、豫め先づ形相缺如（στέρησις）の狀態に於てあらねばならない。質料の形相缺如の存在狀態が卽ち一般に可能的存在樣態と考へ得るであらう。從つて、運動は、可能態より現實態への推移であり、アリストテレスが、自然學第三卷で與へた廣義の運動の定義「可能態にある存在の、それがそうある限りに於ての完成態[2]」（ἡ τοῦ δυνάμει ὄντος ἐντελέχεια, ᾗ τοιοῦτον）が、この意味を示すものである。

所で、アリストテレスの與へたこの定義が正確には何を意味するであらうか。單に可能態から現實態への推移とだけでは甚だ曖昧であらう。第一こゝに δυνάμει ὄντος と云つて居るのは、ロッスの云ふやうに、何等かの能力（ἐνέργεια）の意味に解すべきでなく[3]、ブレンタノの解するやうに、存在の可能態と解するのが穩當と思はれる[4]。所で、ブレンタノによれば、この定義の普通の解釋によれば、運動とは、運動の主體を、潛勢の狀態から顯勢態へと持ち來す形相であつて、しかも、その潛勢態をその儘持續し、完結に至らしめない限りに於ての顯勢態なのである。卽ちこゝでは、可能態に在る主體が、その自然的本質に從つて、或は人爲的な技術によつて、現勢態に實現せられる場合、それ

が、目指す最終項たる形相を自ら取ることによつて、完成態に至る前、それが完成せざる限り、尙潛勢の狀態を持續するが、既に完成態への現實的傾向に於てある限り、―不完全な現勢態にあるものであり、云はゞ生成前の可能態に對し、一つの一層高き可能態にあるこの現實態を運動と名けるのである。卽ち此解釋に從へば、運動とは「この現實化するところの、しかも尙、可能態を完全には盡さないところの生成」なのである。所でブレンタノによれば、此解釋は、眞實な運動に適當した意味を示しては居るが、尙多少の不正確さを免れない。何故なら、此解釋では、運動する主體が、生成前の可能態から、完成態へと進みゆく場合、主體は生成に於ても、同一の可能態を持續しゆくものと考へられて居るが、これはそうではなくて、主體は、生成前の可能態から、より高き可能態へと移つたのであり、運動の狀態に於ては、生成前の可能態が一應解消せられ、新なる可能態が、形成せられると見なければならぬ。この新なる可能態を可能態として可能ならしむる現勢態こそ運動に外ならぬのである。卽ちアリストテレスの與へた定義は、正確には、可能的存在者（τοῦ δυνάμει ὄντος）を、それがそうある限りのものに（ᾗ τοιοῦτον ἐστι）するところの現勢態（ἐνέργεια）を意味するのである。此解釋の正しさは、同一の形相に對し、主體の二重の可能態の存在する場合この兩者を區別する原理がステレシスでもなく、質料でもなく、決局何等かの形相によるものでなければならないことを考へれば明であらう、と。

このブレンタノ見解に對して加へたツェラーの批評は、簡單に過ぎて、その意を充分捕捉し得ないところがあるが、ブレンタノを充分理解しないのに基くと思はれる。ツェラーによれば、ブレンタノのこの解釋は、言語的にも、事實的にも不可能である。何故なら、「可能的存在者の現勢態」と云ふ言葉の使用法は、「可能的存在を可能的存在として構成する現勢態」と云ふ意味を持ち得ないし、また運動は決して、青銅を青銅として可能にするものでなく、青銅を例へばヘルメスの像に形成しゆくところに成立つのであると。[5] この第一の非難は姑く措くも、第二の非難は明にブレンタノの意味を誤解したものであることは、既に述べたところで明であらう。青銅をそうあらしめて居るとこ

ろのものは、青銅の質料を一定の青銅として規定して居る形相であり、青銅を青銅として現勢化するものが運動でないことは、ツェラーも云ふ如く、アリストテレスが、自然學第三卷第一章の運動の定義に引續く、その解明に於て明に述べて居るところであり、ブレンタノがこのアリストテレスの解明を無視する筈はない。即ちアリストテレスは、「青銅が青銅である限りに於て、その完成態が運動なのではない。何故なら、青銅であること（τὸ χαλκῷ εἶναι）と、或種の可能性であることとは、同一でないから」[7]と。更に「可能的なものが、可能的なものである限りに於て（ἢ δυνατόν）、その完成態が運動である」[8]と述べ、この意味を、直ぐ上の文章に於て、運動は可能的存在の完成態ではあるが、それは運動の主體が、それ自體としてそうあるのでなく、それが變化し運動するものとして（ἢ κινητόν）完成的存在であるとき、運動であると述べてゐる。[9]凡て之等の解明から了解し得ることは、青銅が青銅として一定の形相の下に完成態に於てあるが、作られゆくべきヘルメスの像に對しては、可能的存在樣態にある。しかし未だ形成の過程の初まる前に於ては、單なる可能態であつて、ヘルメスの像のみでなく、他の如何なる形相をも取り得る可能性を含む。併し一度形成の過程が初まる場合には、ヘルメスの像への可能性が、かやうな可能性として現實化せられ、他の凡べての可能性は揚棄せられる。即ち、青銅の塊は、既に形相と質料との綜合された個物として、質料の面からすれば、可能的存在とは云ひ得るし、同時に此可能的質料は、一定の形相をもつ限り、既に現實態に在るとも云ひ得るが、ヘルメスの像と云ふ形相に對しては、未だ單なる可能態に在るに過ぎない。それが技術によつて像に形成されゆく時、その可能性は、現實化を受ける。その際生成前の可能性が、單に持續的に現實化され、ヘルメスの形成されると共に完成態となり、可能性は消失するが、生成の過程の間に於ては、未だ可能性が盡くされないで持續する。これは中間の不完全な現勢態、或は、尙可能性に結びつけられてある現實性、或は現實性へと努力する可能性等と考へられる。[10]しかし、同一な可能性が、生成前から同一に持續されると見るのはブレンタノの云ふ如く不正確たるを免がれない。生成の過程に於ては、生成以前の可能狀態がすべて一應揚棄され、云はゞより高き可能性の狀態が、ヘルメス

の像への可能態として現實化せられると見なければならない。此の意味に於て、ブレンタノが可能態がそうある限りに於てこれを構成する完成態が運動であると解したのには正しさが含まれて居ると思はれる。しかし、可能態が可能態として構成せられる完成態と云ふことは、單にブレンタノが解した如き意味に盡きると見るべきであらうか。卽ち青銅をヘルメスの像に形成する運動は、單に青銅のヘルメス像への形成可能性を、さやうなものとして構成する形相に過ぎないか。アリストテレスは、可能態を可能態として規定することは、これを運動するものとして構成すると述べてゐる。ブレンタノの云ふように、可能態を、ヘルメス像への可能態として構成すると云ふことも、運動に含まれた意味ではあるが、同時にそれがそう構成されることが、運動するものとして構成されることであると云ふ意味を見逃してはならない。此點から見れば、ツェラーその他の古來の註釋家の、可能性を盡さないところの現實性と云ふ解釋が新しい光を帶びるように見える。つまりこゝでは、運動の特異な存在論的構造が問題となつた居ることを忘れてはならない。ブレンタノの解釋では、只運動の可能的な性格は明にされては居るが、運動そのものの流動的な性格が逸せられて居るとも考へられる。

勿論、青銅がヘルメスの像に作られつゝある過程に於て、生成前の可能性の存在態がその儘持ち越され特續されるのではなく、云はゞより高い可能性の狀態が構成されると云ひ得るであらう。しかし、云はゞこのより高い可能性の狀態が、只一度限りに形相によつて構成されると見るのであれば、未だ生成運動の構造を明にしたものは云ひ難い。何故なら、青銅の像に作りなされる過程の、云はゞ、各瞬間に、可能性は現實性に姿を變へ、それはまた、より高き現實化を目指す可能性として、自己を構成するであらうから。

尤もアリストテレスの運動を、可能性より現實性への不斷の轉移と解するには、尙難點があるかも知れない。なぜなら、アリストテレスは、運動を單に「可能性がそうある限りに於てのその現實性」と定義して居るに過ぎないのであり、從つて、運動は、運動可能性の實現とも見做し得るからである。しかしアリストテレスの眞意がそうでないこと

は、「運動は何等かの現實性であるが、只未完成のものであり、そして、その理由が、運動がそれの現實性として成立つて居るところの可能性が、未完成であるからである」[11]と述べて居ることからでも推し得るであらう。卽ち運動に於て、可能性が可能性として一擧に構成されるのでなく、可能性そのものが、常に未完成の狀態にあることによつて現實性そのものも、常に未完成の狀態にあらねばならない。可能性が未完成であるとのことは、それが、末だ終極點に到達して居ないと云ふこと、可能性が可能性の狀態を持續すること、を意味する。所で可能性は同時に常に現實化されなければならぬ。そうでなければ、運動は成立しない。可能性が現實化されつゝ、常にまた可能性に止まるためには、可能性の現實化が、常にまた他の現實化を要求する可能性として、云はゞ、より高き可能性の狀態として止まるのでなければなるまい。かやうにして、可能性の現實化から、他のより高きそれへと不斷に進展しゆく過程こそ運動なのであるとしなければならない。

註(1) cf. Bäumker, op. cit. S. 262.
(2) Phys. Γ 1. 201a 10—11.
(3) Ross, Metaphysics. II. p. 326 comm.
(4) Brentano, op. cit. S. 54.
(5) ibid. S. 57.
(6) Zeller, op. cit. S. 351—352 Anm. 3.
(7) Phys. Γ 1. 201a 30—32.
(8) ibid. 201b 4—5.
(9) 此文章は古來種々の讀方あり、こゝではロッに從ふ。尙 Prantl, Acht Bücher Physik. Anm. Zum. III. Buche. 3 參照。
(10) Zeller, op. cit. S. 352.
(11) Met. K. 9. 1066a 20—22.

一八

このことを理解するために、我々は運動と時間との關係を明にする必要があると思はれるが、それに先立つて、可能態、現實態、完成態の意義について考察して置きたい。

アリストテレスの可能性の概念が、有機的自然との密接な聯關を持つものであることは明であらうが、ハンス・マイエル等が說くやうに、δυνάμει ὄν の概念が、直に有機的過程から取り來つたと見るべきか否かは、少くとも疑問であらう。[1] 可能性の概念はもとより單なる主觀的な假定ではない。しかし、可能性は本來アリストテレスに於て、有機的自然の萠芽的素質（Keimanlage）を意味したのであるが、それが類推によつて、非有機的自然にも及ぼされ、そこに潛勢的現實性（Potentielle Wirklichkeit）を作り出したのであると見なすのは、いささか行過ぎと思はれる。勿論彼の云ふ如く、アリストテレス自ら、動植物を例として、生成の成立つために、その根柢に基礎的質料の存することを說明して居るが、[2] 彼自らも許す如く、アリストテレスが、質料や形相の概念を導き出す際には、彼は主として ποίησις に卽して行つて居るのであつて、現に上述の箇所に直ぐ續いて、生成の五つの形態を述べ、その中四つ迄人工的制作に關して居るのを見ても、アリストテレスの可能性の概念は、イェーガーやフアウスト等の考へるやうに、その起源を人間の藝術的制作活動に持つものと見るが穩當ではあるまいか。イェーガーは、アリストテレスのエンテレケイアの概念は、本來論理的・存在論的意味を持つもので、生物學的意味を持つものでない。これを生物的生命から發展せしめたものと見、他の領域に適用されたのは、寧ろ正しからざる一般化だと見做し、生物學的な生命力の如きものと解するのは、惡しき近代化であるとし、可能性や現實性の概念も、屢々、種子、或は出來上つた制作品を例として說明されては居るが、本來、有機的發展をなすものから取られたものでなく、恐らく、人間の能作（menschliches Können）から來たものであらう。卽ちこの能作は初め潛勢的に横はり、やがて活動に移り（ἔργον）、次にこの活動

狀態（ἐνέργεια）に於て、その目的に到達する（ἐντελέχεια）と述べて居るのは、[4] 多くの點に於て示唆に富む解明である。確に、アリストテレスが、之等の概念を說明するのに、好んで人工的制作品を用ゐたと云ふことは、單に說明の便宜以上の意味を持つと見ねばならない。本來の意味に於て自然的なものは、運動の原理を、運動する自己自身の中に有する。卽ち δύναμις ποιητική が變化するものの中に存在するのであるが、人工的制作品では、δύναμις παθητική のみが存し、此 δύναμις を ἐνέργεια に迄發展せしめるためには、自己以外のものに、運動因が存在しなければならぬ。卽ちこゝでは、可能性は、現實化的諸力と、單に概念上のみでなく、實在的にも區別せられて居る。[5] 所で此可能性が現實化するには、人間の現實化的な力が加はらねばならぬ。かくて靑銅に存する可能性は現實化せられ、ヘルメスの像を形成するに至つて、その目的を達し、運動は止む。卽ち人工的制作品に於ては、その形成の過程に於て、人間の技術的行爲を必然的な側面として含んでゐる。制作品に存する受働的な可能性は、人間の技術に存する能働的な可能性の、云はゞ客觀化である。このことは、アリストテレスが、δύναμις を說明する場合に、例へば人間の坐り得る能力を基礎として說明して居るが如きを見ても推察し得る所である。「δύναμις を持つと云はれるものの ἐνέργεια が生ずる場合、何等不可能でない時、これは可能的である」[6] と云はれる。またそれに續いて「建築しつゝあるもの（τὸ οἰκοδομοῦν）」と「建築師卽ち建築する能力あるもの（τὸ οἰκοδομικόν）」を、「覺めつゝあるもの（τὸ ἐγρηγορός）」と「眠りつゝあるもの（τὸ καθεῦδον）」を、「見つゝあるもの（τὸ ὁρῶν）」と「眼を持ちながら、これを閉しつゝあるもの（τὸ μῦον μὲν ὄψιν δὲ ἔχον）」を、それぞれ對立せしめ、現實性に對し、可能性の性格を特徵づけて居る如き、殊にメガラ派が、可能的存在狀態を否定し、現實的能力のみを主張するのに對し、その不合理であることの論證に、建築師の可能的能力の實存を根據として居る如きも、[7] 以上の解釋の正當さを裏づけるであらう。また第五卷第十二章のかの δύναμις の意義の說明に於て、「δύναμις とは、運動或は變化の原理が、運動變化するもの以外に在るか、或は他のものとしてその運動者自體にある時、その原理を意味する」と述べ、δύναμις を變化するもの以外に

存在する場合を先づ掲げて、根源的な意味と解して居ることも、以上の推測を確かめるであらう。

すべてこれ等の所論からして、アリストテレスが、その可能性の概念を、人間の制作的行爲に關係せしめて理解したと見ることは、必ずしも行過ぎでないと思はれる。人間の制作的能力は、現實態として働き出す前に於ては、可能的な存在の樣態に於て在る。このものが現實に働き出せば、制作品の素材例へば靑銅の塊に存する受働的可能性を運動變化へと動かす力となり、それがヘルメスの像として完成せられたならば、制作の目的は實現せられ、運動は靜止する。制作活動に卽して、アリストテレスの可能態・現實態・完成態を理解することの容易さは、かの自然學及び形而上學に於ける四つの原因の解明にも見られる。[8] 人間の制作活動に於ては、先づ質料因として制作の素材が存在しなければならぬ。次に形相因として、素材が制作の後占める παράδειγμα がなければならぬ。この παράδειγμα は制作者の精神内に抱かれる觀念として存在する。更にこの素材が制作品に作り上げられる爲の動力因として、制作者の能力が ἀρχὴ τῆς μεταβολῆς として存しなければならぬ。最後に制作者の抱く觀念は、一方制作品の取るべき形相であると共に、制作者が素材の上に實現しゆくべき目的因であり、制作品が完成されることによつて、目的は完成せられるのである。卽ちこゝでは、一方、質料的素材の形相への運動が在ると共に、他方、制作能力の可能態から現實態乃至完成態への推移がある。制作的素材の形相への運動は、もと制作者の内なる動力因の作用がなければ起り得ないのであるから、本來從屬的であり、可能性の現實化としての運動は本來制作の主體的活動に卽して理解せらるべきであるに拘らず、主として制作品に卽して解明せられたと云ふことは、アリストテレス存在論の特異性であらう。卽ちこゝに於ても、可能性の概念が本來人間主體の能力及びその存在樣態から導き出されたに拘らず、彼の體系に支配的な自然論的傾向の爲に、主體性が中性化され、平準化されたと見るべきであらう。

靑銅がヘルメスの像に作り上げられ、木材や石塊が家に作り上げられる場合、彫刻家や建築師の主體的な活動こそ、主體的な存在論に於て先づ取り上げなければならぬ重要な契機であり、その存在論的な構造こそ明確な分析を必

要とすると思はれるのであるが、アリストテレスの客體的な存在論に於ては、この主體的な契機は、客體的な契機に類同せられ、具體的な、歴史的主體の、主體的・世界的な構造聯關が、存在論的分析の眼から逸せられてゐる。彼の存在論の中心をなす現實的な個物も、歴史的行爲の主體たる個體、卽ち作るところの主體、乃至歴史的世界に於て作られる個體の意味を失つて、自然的な對象界に於て、自然的に生成し變化する個物と、その存在論的な本質に於て意味を同じうすると見られる。尤も、アリストテレスは、ポイエシス、プラクシス、ゲネシスの三つの作用を直に同一視したのではない。却つてこれを區別し、差異を明確にしはしたが、ステンツェルの所謂「對象的思惟」[9]は、主體的な作用を主體性に於てゞはなく、却つて客體的な平面性に於て把握せしめて居り、可能と現實の相對的推移に於て、運動の內面的構造を理解しようとしたことは、主體的作用の自然平準化の現はれと見るべきであらう。

註(1) H. Meyer, Der Entwicklungsgedanke bei Aristoteles. S. 74 u. Anm.
(2) ibid. S. 75 ; 85.
(3) Phys. A. 7. 190b 3—5.
(4) Jaeger, Aristoteles. S. 410-411.
(5) cf. Faust, Möglichkeitsgedanke. S. 102—103.
(6) Met. Θ 3. 1047a 21—26.
(7) ibid, 1046b 29—1047a 4.
(8) Phys. B. 3 ; Met. Δ 2.
(9) Zahl u. Gestalt. S. 121.

一九

さて、アリストテレスが、運動を單純に可能より現實への相對的推移と解したと見るのは、いささか行過ぎであらう。

此事は、我々の既に論じたところからも、大體に於て明なことであるが、更にかのステレシスの概念を檢討することによつて、一層明にせられることであり、それはやがて、存在論的可能性の本質に、時間が如何に重要な關係を持つかを示すであらう。ステレシスが、存在論的可能性の規定的要素たることを詳細に論じて居るのは、ファウストである。[1] 今我々は彼の所論を手引として、論述を進めて行こう。

ファウストは、範疇論第十章の所論と形而上學第十卷第四章の所論との間に存する矛盾から出發する。卽ち前者では、對立（ἀντικείμενα）の四種が區別される。關係上の對立、反對の對立、缺如と所有の對立、肯定否定の對立、これである。此四つの對立は、互に嚴密に區別せられなければならないとされる。して見れば、矛盾は、こゝでは、反對對立と認められてゐないことになるし、又、缺如と所有とは、反對對立から區別せられなければならない。所が形而上學では、缺如と所有とは、反對對立（ἐναντία）、否、根本的な反對（πρώτη ἐναντίωσις）と考へられて居り、のみならず、缺如が、一種の矛盾であり、否定を手引として見出されると見做されて居る。卽ち、形而上學では、根本的な生成（πρώτη γένεσις）は、根本的な反對對立に基くので、その根本的な反對對立こそ外ならぬ所有と缺如との關係なのであるが、範疇論の說くやうに、所有と缺如との間には反對對立關係がないと云ふことになれば、兩者の所論に矛盾が免れない。所でこの矛盾を、トランデレンブルクのやうに、範疇論の最終章は、僞作だと考へたり、或は、この著作を全的に僞作とする——例へばイェーガーのやうに——ことによつて解決することは、極めて容易の道ではあるが、容易であると云ふことは必ずしも正しいと云ふことを意味しない。ファウストは、こゝにこそ、缺如の概念と、可能性とが存在論的に密接に結びつくべき深い理由があると見る。卽ち普通單に論理的な表現手段を、かやうなものとして取扱つて居る範疇論では、缺如と所有の概念は、後賓位語として理解せられ、かやうに理解される限りでは、反對對立概念とは區別される。何故なら、普通反對對立の場合には、對立して兩極端項の間に、中間項を許す場合と、そうでない場合とあり、後者では所謂二者擇一の必然性が横はるに對し、前者には、云はゞ排除性の必然性が

横はる。所が、缺如と所有の兩概念には、かやうな意味の必然性は、兩方共に認めることは出來ない。これ卽ちアリストテレスが、範疇論で、缺如と所有を、反對對立から區別した理由であるが、しかも、彼自ら範疇論でこの區別した理由を說明して居る論證で[2]、所有と缺如の概念には、時間的規定の伴ふこと、そして、主體が或一定の時期に到達した場合には、存在論的な對立が必ずしも不可能でないことを暗示してゐる[3]。所が、形而上學や自然學では、云ふ迄もなく、時間的に經過する生成が論究の中心を占めるのであり、從つて、或種の基礎概念に、時間的規定が取上げられて居ることは、自明的と考へられる。つまり、範疇論と形而上學の所論に矛盾があるように見えるのは、單に後資位語として扱はれてゐる場合と、存在論的概念として、現實の世界生成の基礎概念として取扱はれてゐる場合の相違から來る、云はゞ表面的な矛盾に過ぎない。此矛盾の奥に進み入ることによつて、却つて、われわれは、ステレシスが、存在論的概念として、如何なる本質のものであるかを知ることが出來る。卽ちステレシスは、時間的規定と結付くことによつて、可能性の概念と深い密接な關係に立つものなのである。

以上のアアウストの見解には、多くの首肯すべきものが含まれて居ると思はれる。確かにアリストテレスに於て、生成の運動變化を可能から現實への推移として理解する場合に、ステレシスが重要な役割を演じて居ることを見逃すことは出來ない。質體的な生成變化の基體乃至主體として、質料的なヒポケイメノンが措定されなければならぬ。生成變化は、かやうな基體の生成として、また變化として理解されるからである。所で、基體が生成し變化すると云ふことは、基體そのものの無規定性が、形相によつて規定されることである。基體そのものは、無規定的ではあるが、それが形相によつて規定され得る能力あるもの、可規定性のものでなければならぬ。此可規定的な能力がアリストテレスの可能性と見ることが出來るのであるが、質料が單に質料としてある間は、云はゞ無限の可規定性を自己の中に包含して居るのであつて、質料がそう止まつて居る限りは、未だ眞實には、可能性の狀態にあるとは云へない。例へば粘土は、固められて、彫塑ともなり得るが、また煉瓦となつて更に家ともなり得るからである。この場合、われわれ

は　粘土が直に家に對して、可能性の狀態にあると云へないのであつて、建築材料としての煉瓦となつて初めて家に對する可能性の狀態にある。否、更に嚴密に云へば、煉瓦も、家となり得ると同時に、防壁ともなり得るとすれば、之等諸他の可能性を只一つの可能性に限定するものは何か。煉瓦が他の諸種の資材と共に、特に家を建築する資材としてそこに横はるとき、云はゞ建築師の技術と云ふ動力因の加はり來るのを待つのみの狀態に置かれた時、その瞬間に於てこそ、初めて煉瓦は家に對して可能態にあると云ひ得るであらう。云ひかへれば、或一定の形相を受取り、これによつて限定せられ得る可能的な狀態に於て、變化の基體が見出される時、卽ちその基體が、正しくその形相を持ち得べきであるに拘らず、未だ機熟せずしてその形相を缺如して居る時、その變化の主體は、その持つべき形相に對して、或は寧ろ、その形相によつて限定せられた狀態に對して、可能的な狀態に在ると云ふべきである。して見れば、主體の生成變化に際して、對立をなすのは、或形相と他の形相とではなくて、或一定の形相の缺如態と所有態でなければならぬ。形相と形相とは必ずしも常に對立するものでなく、寧ろ一つの形相の上に更に他の形相が重なり來る場合が多いのである。缺如こそ、所有に對して常に對立をなすものであり、所有と缺如とのこの對立が生成變化を可能にする、かの反對對立と考へ得るのである。

所で、缺如にも多義あることをアリストテレスは認めて居るのであつて、[1] 生成變化を可能にする缺如とは、具體的存在論的の缺如であつて、生成變化の主體が、生成變化の具體的存在の世界に於て、その本性上當然持つべき筈の形相を缺如して居る場合、その缺如態と所有態とが反對々立をなすものとして考へられる。缺如を單に可能性一般の缺如として抽象的に解する場合には、存在論的に可能性と密接な聯關あるものとは考へることは出來ない。

かやうにして、缺如を具體的な存在論的な意味に於て理解する場合には、それは常に變化の主體と結合して考へられ、時間的な規定と必然的聯關に於て考へられるのである。かやうな缺如が初めて存在論的可能性と密接な關係があり、この缺如によつて、存在論的可能態が、そのやうなものとして成立つと云ひ得るのである。そこで、生成變化、

否一般に運動に於て、可能態より現實態への推移と云ふことは、同一形相の缺如から所有への推移が、變化の基體に於て行はれると云ふことである。このことを更に詳細に考察すれば、變化運動に於て、質料的基體は、形相的限定を受けることによつて、可能態から現實態へと推移する譯であるが、その際、可能態から現實態への推移を說明するには、單に質料と形相の概念のみでは不充分である。質料が無限の可能性の母胎として、しかも一定の方向への形相的限定を受けることによつて、可能性の現實化が行はれるのである。このことを可能にする原理が缺如である。缺如によつて、云はゞ質料に於て眠りつゝある無限の可能性が、一定の方向へと限定せられ、新しい形相の入込み來る準備狀態に基體を置くのである。缺如を通し、缺如の媒介を經て、可能態に在る基體は現實態へと移行する。かやうにして、缺如は可能性並びに可能性から現實性への推移としての運動變化を理解せしめるのである。

註(1) A. Faust, op. cit. S. 104 ff.
(2) Cat. 10. 12b 26–13a 17.
(3) ibid. 13a 6–10.
(4) Met. Δ 22. 1022b 22–1023b 7.

二〇

以上述べたやうに、生成變化に於て、缺如が可能態から現實態への推移を媒介的に可能にする存在論的原理と考へられるのであるが、それがそうあるためには、時間的規定をともなはなければならぬと云はれる。このことは如何に解釋すべきであらうか

われわれが先に述べた自然學に於ける時間及び「今」についてのアリストテレスの說くところから得られる重要な結果は、「今」はいつも運動體に卽して把握され、「今」の「前」「後」の性格も、運動體の相對的な場所的差異に基因

せしめられて居るといふこと、及び、「今」は過去と未來の終局並に始源として、時間の限界をなし、時間の非連續性を保證するといふことである。今自然學に於けるこれ等の思想を、さらに本源的に追求して、彼の存在論の基礎構造に肉迫することを試みよう。

アリストテレス自然學の時間論の背後には、物理的な運動體の場所的運動との類推が横はつて居ることは明であらう。「今」の「前」「後」の性格を、場所の相對的差異に基かしめて居るのは、それを示すが、このことが、時間と場所との存在論的聯關を示す意味に於て興味は深いが、時間的な前後は、場所的な差異から原理的に來るものではない。時間を定義して「前後に從つての運動の數」と云ふとき、われわれは既に、時間の基礎存在論的本質を假定して居ると云はねばならぬ。何故なら、前後そのものこそ、時間の本質に外ならないからである。前後の區別が立つことによつて「今」が得られることは、アリストテレスの明に認めて居るところであるからである。[1] 所でわれわれが前後の區別を認知するのは、彼も云ふやうに、運動體が運動によつて、場所を轉移するからであり、[2] 場所の相對的位置の差異から、前後の區別の來ることが論定されたと思はれるが、運動體の場所の轉移が、時間の前後を認知せしめる機會ではあつても、それが直に前後を生ぜしめる譯ではない。換言すれば、自然學で論ずる限りに於ての時間は、彼の存在論の基礎的構造をなす時間を示唆するものではあるが、それが直に根源的な時間なのではない。かやうな根源的な時間を、場所の場合と同じく、現實的な個體の行爲的實存に卽して把握することは、甚しくアリストテレスそのものを離れたものと云はれるかも知れないが、彼が運動を可能より現實への推移と見た所に、時間の本源的な樣相を見出すことは、必ずしも歪曲とのみは思はれない。

既に述べたやうに、アリストテレスの運動を理解するには、ステレシスの概念が重要な役割を演じて居るのであるが、これは一方に於て變化の基體たる質料を指示し、同時に或一定の形相の缺如を指示することによつて、存在の可能態より現實態への推移を、正しくその推移に於て示すものと云へる。そしてステレシスが存在論的意義を示すのは、

それが時間規定と結合する時である、とわれわれは云つた。しかし、實は、現實的な實存が生成變化の過程に於て、一定のステレシスの位置に立つたと云ふことが、それが現實的に在ると云ふことなのである。ステレシスに於て現實的な個物は、一方、すべて既に持てる形相的限定を、質料的基體の可能的樣態に轉ずると共に、他方未だ持たざる形相を、現實的方向に限定する。否、ステレシスに於て、質料的基體の形相的限定が行はれるのであつて、質料の可能化、形相の現實化、共にステレシスの媒介による。前者が過去の方向を示し、後者が未來の方向を示すことは明である。

かやうに、生成變化に於て、ステレシスの狀態に在ると云ふことは、單なる否定を意味するものでない。却つて質料的基體を、可能的なものとして構成し、それの新なる形相的限定による現實化を媒介する否定的轉換の契機として、現實そのものの積極的本質をなすものである。生成變化とは、かやうにして、否定を媒介とする可能より現實への推移であり、轉換である。

註(1) Phys. Δ 11, 219b 25.

(2) ibid. 219b 23 25.

二

以上われわれは、アリストテレス存在論の基礎構造の一としての本源的時間の構造を略述したのであるが、固より、彼自ら明にかやうな時間並びにその構造を、かやうな名の下に理解してゐたと云ふのではない。只彼の存在論の基礎構造を追求すれば、かやうな時間を本質的に認めてゐたと解し得ると云ふに過ぎない。このことは、本源的時間の自然的平準化として理解すべき、自然學の時間が、時間の限界としての「今」を中心として理解し得ること、「今」に於て過去と未來が分離せられると共に結合せられること、「今」の非連續的な連續が時間量をつくること等が、ステレシスを中心とする本源的時間の構造と類似することによつて想察し得るであらう。自然的時間の基礎に豫想せられる

「前後」は、「場所」から來るものでなくて、却つて、本源的時間たる、可能から現實への推移に基くのである。しかし、アリストテレスは、これを明に自覺しなかつた。彼の存在論は、現實的實存の存在論的體驗に根ざして居るに拘らず、當時一般の傾向に從つて、自然學的傾向が強く、基礎的存在論が、自然存在論の方向に偏倚したことは確であらう。

しかし、アリストテレスが、「前後」が場所から來るとした考方にも深い意味を見出すことが出來る。何故なら、時間と「場所」とは、決して無關係な原理ではなく、兩者は、存在の二つの根本的な原理であり、且つ相互に密接に聯關するものであるからである。自然學に於て運動體が運動することは、場所を轉ずることであるが、それは決して時間を離れるものでない。時間も亦運動體の運動を離れるものでないから、時間の「前後」は、運動體の場所の相對的位置に基くと考へることは自然であるが、本源的には、「前後」は時間そのものに屬するのであり、單に場所的位置の相違に基くものでない。しかし、場所そのものが、既に述べたやうに、現實的な個物的實存の存在を可能ならしめる存在論的な原理だとすれば、場所的相違も、時間の「前後」的區別と密接不離な關係にあることは明で、アリストテレスが、「前後」を場所の相對的位置に基けようとした動機を理解し得ない譯ではない。

二二

以上われわれはアリストテレス存在論の基礎構造を追求して、一方、個物的實存が、その世界に於ける個體性を確立するために、自己を世界的環境との聯關に於て、場所的限定をなすと共に、他方、その現實的個別性を確立するために、自己を一定の「今」の現實的な點に時間的に限定するものであることを知つた。質料と形相は、云ふ迄もなく、彼の存在論の根本支柱をなすものではあるが、これは、本來抽象的に別個の原理として取り上げられたものでなく、具體的な體驗に於ける現實的個物の存在論的反省によつて、その二つの構成原理として取出されたものであり、從つて質料の形相化と云ふも、本來別個の二つの原理が相結合すると云ふよりは、一つの現實的個物の質料的並びに

形相的側面として理解せらるべきであり、かやうな個物が、生成變化の具體的世界に於て、變化運動の主體として、自己を世界内存在として限定しゆく存在論的形式が、所謂範疇と呼ばれるものであり、しかも、かやうな存在論的形式に從つて、個物が自己を主體的に又世界的に限定しゆく場合、それが、世界内に於ける現實的な個物として自己を限定するためには、一方「場所」としての空間的原理を必要とすると共に、他方、可能より現實への推移の媒介としてのステレシスとしての時間的原理を必要とすることを知つたのである。

かやうな時間及び空間は、云ふ迄もなく本源的な時空として、明らさまには說かれてはゐないが、アリストテレス存在論の基礎構造をなすものとして、認めざるを得ないと云ふのが、われわれの論旨であつた。併し、それと同時にわれわれは、彼の存在論に於ては、この本源的な時空の内面的構造が、自然學に於ける時間及び場所の理論の影響の下に、否彼の存在論が、一般に自然存在論たる自然學の所論の影響の下に立つて居ると云ふ事情に基いて、基礎的存在論に於ける本源的時空の辨證法的構造が、云はば平準化せられ、立體的構造を失つて居ることを注意せざるを得ない。何故なれば、例へば、「場所」についてこれを見れば、「場所」は、本源的には、行爲的主體が、歷史的現實としての世界的環境に於て、主體の現實的・個別的主體性を確立する基礎存在論的原理として、否定的媒介の機能を持つものであり、主體と客體的世界との對立的綜合を可能ならしめる原理である。所がアリストテレスに於ては、かやうな辨證法的な構造が、充分に認められて居るとは云ひ得ない。アリストテレスが、その範疇論に於て、能働と受働の二つの範疇を認めて居ることは、彼が單純に自然存在論に滿足したものでなく、行爲的實存の存在論的體驗に基いて範疇を見出したと見るべきであるとは、われわれの既に注意した處であるが、しかも、彼はこゝに於て、行爲、動作、狹義の運動等の間に存する存在論的な區別を充分に考慮に入れて居ない。尤も周知のやうに技術的制作行爲と、自然的な生成運動との差を充分認識して居り、その内面的な構造も、可なり立入つて論究してはゐるが（形而上學第七卷第七章）、未だ辨證法的な構造を明確に規定するに至つて居ない。

これを要するに、アリストテレスの存在論は、その意圖に於て、個別的實存の世界内に於ける存在論的體驗を基礎として、實存論的方向を指し示すに拘らず、自然存在論を基礎として、それとの基礎的な聯關に於て展開せられた形而上學に於て、存在論の内面的構造が、一般に立體性を失ひ平準化せられたと見ることが出來よう。かやうにして自然存在論的な立脚地から立せられた不動の動者は、新しい基礎的存在論の立場から、新しく檢討し直されなければならないに拘らず、遂に、そのことなくして終り、形而上學に於ても、自然學に於てと同じく、運動の存在の必然性から、その始源としての動者が論定せられる。しかし第十二卷に於て、神が現實性を本質とし、最高の善であり、永遠の實體であることが高調せられて居り、これ等の思想が、直接プラトンに連るものであるにしても、後期アリストテレス存在論の基本的な性格と、何等かの密接な聯關を持つものであることは論定されていゝであらう。（完）